

橋下『教育改革』とその政治的社会的背景

——現代の貧困に焦点を当てて

五十嵐 仁（法政大学大原社会問題研究所教授）

「ブログ 五十嵐仁の転成仁語」―掲載2013年7月26日（金）～30日（火）
〔本稿は2012年10月28日に行われた「憲法にもとづく教育をすすめる岩手の会」のフォーラム「今、教育で何が起きているのか」における基調講演を要約したものです。会の交流誌『まなびあい』第12号、2013年7月号、に掲載されたものです。〕

はじめに

今、教育が非常に大きな焦点になっています。大阪では橋下徹市長（元府知事）が教育改革

を行おうとし、安倍晋三氏もなみなみならぬ意欲を持っています。今日はその中でも大阪の教育改革についてお話しさせていただきます。

I 今、大阪で何が起こっているのか

(一) 橋下徹と「大阪維新の会」

「大阪維新の会」の名称に「維新」という言葉がありますが、この維新の代表格である明治維新で何が起きたのか。それは「王制復古」です。新しいものにならなくなったのではなく、太政官制のような古い政治の枠組みが蘇りました。今、橋下氏がやろうとしていることは、これと同じです。古くさいことをやろうとしている。維新という言葉は、実はそういうことを明確に示しているのです。

(二) 府・市条例の問題点

教育改革との関連で問題となるのは、府と市で制定された条例です。それは端的に言えば「新自由主義的な教育改革を目指す」「府知事・市長による教育への介入」「教職員に対する管理・統制の強化」を内容とするものです。これらの改革によって、行政のトップが教育のあり方や内容を定めることができるようになります。

【論巧】 橋下『教育改革』とその政治的社会的背景

二〇一二年三月二三日に大阪府で三つの条例が成立しました。職員基本条例と教育行政基本条例、府立学校条例です。職員基本条例で一番強調されているのは、職員の分限免職です。規律と統制を強化し、言うことを聞かない奴は首を切るといふ、いかにも「橋下によるファシズムⅡハシズム」です。強権的な行政のあり方が明瞭に目指されている。

それから後二者の教育関係二条例は、「教育目標を知事が定めることができる」「教員の人事評価に保護者・生徒の評価を反映させる」「府立学校の学区を廃止する」「定員割れが三年続いた学校は『再編整備』の対象となる」「定年退職で空いた校長ポストは原則内外から公募する」などという内容です。

本来であれば、学校運営のトップである校長は、最も運営能力があり、教育に対する識見もある方が先生たちの中から選ばれるのが当然です。ところが、一般の人から公募で校長を選ぶ、評価にも保護者・生徒の意見を反映させる、学校教育の目標は首長が定めるといふように、学校の外の力で教育を動かそうとしています。この背後には「教育のことは教育の専門家に任せられない」という倒錯した思考があります。また、行政のトップが教育を左右してはならないというのは、教育の一貫性・継続性を維持するためであり、政治的介入を防ぐための知恵でした。これは戦前の反省を踏まえての措置ですが、これを橋下氏は全く考慮していないというのも大問題です。

このような懲罰的な教員統制や、成績が悪い学校は閉校・整理統合してしまうという手法は、

サッチャーの教育改革やアメリカの「落ちこぼれゼロ法」と同じです。二〇一二年二月に放映された「VOICE」というアメリカのテレビ番組は、教育改革の失敗を扱ったものでした。そこでは、「大阪は同じ轍を踏むことになるだろう。せつかく教育改革する機会があるのなら、私たちが歩いてきた一〇年間を繰り返して欲しくない」、「アメリカは失敗したんです。それを日本が繰り返すのは悲しい」という意見もありました。

(三) なぜ、「教育改革」なのか

それでは何故、橋下氏は教育改革に取り組もうとしたのでしょうか。まず、公務員攻撃の一端として、教員に対する攻撃を行っているという面があります。府知事になってすぐに「大阪府の施設における国旗の掲揚及び教職員による国歌の斉唱に関する条例」を成立させ、学校行事で「日の丸・君が代」を強制しました。従わなかったら、処分するというわけです。大阪府でも同じような条例が制定されています。

もう一つ、二〇〇七―二〇〇九年の学力テストで大阪の子どもたちの成績が非常に低いことに橋下氏が問題意識を高めたためだと思われます。実は、学力の低さは貧困と密接な関連を持っています。家庭における教育環境のあり方、家庭の貧しさが学力を左右します。塾に行けるか行けないか、自分の部屋を持っているか、家族全員で出かけたりに旅行に行ったりする余力があるか。こういう家庭環境や社会的な体験・経験は子どもたちの学力育成に大きな意味を持ち

【論巧】橋下『教育改革』とその政治的社会的背景

ます。

しかも今、ゆとり教育が否定され、教育内容が増えて事前事後の家庭学習が大きな意味を持つてきています。このように家庭の中での学習の量と質の持つ意味が高まってきている中で、家庭での学習環境が劣悪であったりすると大きなハンデを負うことになり、学力上の差が出てきてしまいます。

II 背景としての貧困問題

(一) 日本における貧困化の増大と格差の拡大

このように教育と貧困が密接な関連を持ち、しかも、日本社会の貧困化が進んでいて、格差が拡大している。教育の条件が劣悪化しているということになります。貧困の国際基準に当てはまる人が一六％（先進国三四カ国中ワースト六位）で、二〇一一年のサラリーマンなどの平均年収は四〇九万円（一九九〇年と同じ水準）です。年収二〇〇万円以下の人は一〇六九万人で二三・四％、二〇一二年三月の生活保護受給者は二二〇万八〇九六人（九カ月連続で過去最多更新）でした。

このように貧しさが深まっている一方で、年収一〇〇〇万円超の人は全体の三・九％で四年連続の増です。億万長者は一〇年前の三倍以上というように豊かな人も増えており、中間層が減

っている。また、国が教育にかける財政的支出は、二〇〇九年のGDPに占める公的支出割合三・六%でOECD三十一カ国中最低、一一年度の就学援助の小中学生は一五六万七八三一人で過去最多（一六年連続）です。

今、日本は大変なデフレ状況で物が売れないため、経済対策として財政支出を増やそうとしています。景気を良くするためには、四つのことをする必要があります。一つは、使えるお金（可処分所得）を増やすことです。そのためには、給料などの収入を増やし、税金や社会保険料などを安くして義務的な支出を抑えなければなりません。消費税を上げるなんてとんでもない。二つ目は、労働時間を短縮して、お金を使う時間を保障することです。多くの労働者は労働時間が長過ぎて自由な時間や余暇を過ごせない。つまり、お金があっても、忙しくて使えません。三つ目は、貯める必要をなくすことです。将来への不安を解消して安心できるようにする。医療や介護、年金などを充実することです。四番目は魅力的なサービスや商品を生み出すことです。人は高価であっても、買いたいものがあれば買います。この四つの条件がそろえば景気はたちどころに回復する。

現実には、貧困化が進んでいて、物が売れません。景気が悪く、社会的活力が低下していく。教育にも充分なお金をかけることができない。これは、まさに社会にとつての大きな損失であり、将来に向けてツケを先送りすることになります。

【論巧】橋下『教育改革』とその政治的社会的背景

(二) 大阪における貧困問題の深刻さ

大阪の場合、貧困問題は更に深刻です。府の生活保護受給者数は全国最多になっており、市で一五万人(市民の一八人に一人)、二〇一一年度予算に占める生活保護費の割合は一般会計の一七%(過去最高の二九一六億円)です。人口一〇万人当たりの犯罪発生件数(犯罪率)はワースト・ワンで、市における年収二〇〇万円以下の世帯は約二五%と突出しています。また、二〇一一年度の就学援助の小中学生の割合は府が最多で、約二七・四%となっています。

このように、大阪では貧困化が進んでいます。だから、橋下氏は府と市の二重行政の解消、つまり「大阪都構想」を打ち出しているのです。しかし、二重行政を解消すればどうして貧困問題が解決するのか、という点が不明です。ここには飛躍があるからです。貧困を解消するには、そのための経済政策・産業政策を実行する必要があるわけで、行政のあり方や制度の問題ではありません。

橋下改革の第二の柱である公務員制度改革も、貧困問題を解決することにはなりません。人員削減と減給、労働条件の悪化は、公務員の士気を低下させます。そうすれば、公共サービスの質が劣化し、ますます府民の生活水準も下がることになるでしょう。しかも、東日本大震災によって、いかに公務員が最後のセーフティネットとして大きな役割を果たしているかが明瞭になったわけですから完全に時代に逆行しています。

(三) 橋下市長における教育観の貧困

橋下氏は「教育とは二万%命令です」と言っています。一般的に言って、教育観には「命令によって押しつける」、「可能性や創造性を引き出す」という二つの対立があります。今の主流は、子どもが持っている可能性や創造性を引き出すというものです。橋下氏はこの捉え方に公然とチャレンジしている。戦前の教育は失敗しました。大きな犠牲を払って強制やマインド・コントロールによる教育は間違っていたということを学んだはずです。

同じように、ルールについても押し付けなくてはならないという捉え方をしています。これも間違っています。民主社会におけるルールは、必要なものは作り、間違っているものは作りなおすというものです。主権者はルールを一方的に受け取るのではなく、主体性を持って、自らよりよいルールに変えていかなければなりません。教育の役割は、こうした主体性、自覚と能力を持った子どもたちを育成するところにあります。

Ⅲ 政治的背景——やり場のない不満と閉塞感の高まりに訴えた「改革幻想」

(一) 「橋下旋風」を生み出した背景

それでは、「橋下旋風」は何故生まれたのでしょうか。差し当たり、四点挙げる事ができ

【論巧】 橋下『教育改革』とその政治的社会的背景

ます。一つは、橋下氏のキャラクターであり、そのキャラクターを広めていったテレビの力です。彼は弁護士ですが、二〇〇三年にテレビ番組のレギュラーとなり、知名度を高め、討論能力があつて親しみやすい、若さとバイタリテイのある存在になっていきました。彼自身もそのことを自覚していて、「メディア抜きには僕なんて存在できない政治家ですよ。メディアの皆さんが僕を無視して、報じないってことをやれば、僕は終了」と言っています。

二つ目は、パブリケーションの巧みさです。敵を演出して叩くという「瞬間芸」とも言える短い応答、問題を単純化して相手をやり込める力、「ふわっとした民意」や世間の空気を読んで発信し行動する能力。しかも、強権的ではあるけれど、世論の反応を見てマズいかなと思つたら、さっと引きます。ここが重要です。職員に対するアンケート調査も「思想調査じゃないか」と批判されたら、すぐにやめちゃう。条例も案として最初にひどいものを出し、手直ししてみんなを巻き込む。非常に巧みです。

三つ目が、大阪という土地柄の特性でしょうか。お笑い芸人などの「オモロイ」ものが受ける文化、土地柄であるということです。

そして四つ目が、貧困化の増大と格差の拡大が生み出した社会的政治的意識の変化です。自分たちより恵まれた人たちを引きずり下ろすことによって溜飲を下げるといふ「うつぶん晴らし政治」（内橋克人）や「引き下げデモクラシー」（丸山眞男）が拡大してきています。公務員や教員は、それほど恵まれているわけではありませんが、厳しい状態におかれている民間企業

や非正規労働者から見ればまだましだということで、橋下氏によってスケープ・ゴートにされてしまったのではないでしょうか。

(二) 期待感の高まりを生み出した要因

橋下氏への期待が何故高まったのか。それは、彼の政治・行政に対する批判や問題の指摘に一定の根拠があったからです。誇張したり過大に言ったりしていますが、いじめや低学力などの教育問題の発生や教育そのものに対する強い不満の存在、教育委員会の形骸化などは否定することのできない事実です。行政当局と労働組合の関係においても、一般の府民・市民にとっては問題だと思われるような事実もあり、橋下氏の批判に全く根拠がないわけではない。だからこそ、それなりの説得力を持ったわけです。

二つ目としては、これまで政治に関心がなかった、無縁であった人たちが橋下氏の呼びかけに応えているということです。そういう人たちは、自ら政治に働きかけて変えたいという積極的な意欲があると思われませんが、同時に、既成政党や既成政治家に対する大きな不信感や不満を持っている。だからこそ、その不満の受け皿として橋下氏への期待が高まり、大阪維新の会、日本維新の会が選ばれることになるわけです。

(三) 政権交代と民主党への幻滅

また、現在、国会の構成と世論状況とは大きく乖離しています。これは、一九九四年の選挙制度改革で小選挙区制が導入されたことに由来します。これによって投票での支持分布と議席配分との大きなズレが生じ、国会は世論状況を反映しなくなりました。この政治改革とその後小泉氏の構造改革、そして今度の税と社会保障の一体改革。この流れの中で貧困は拡大して生活は苦しくなるばかりです。しかも、政権交代で与党となった民主党は全くの期待はずれでした。政権交代と民主党への幻滅の中で、橋下氏への期待と支持が高まっていったと考えられます。

また、橋下氏自ら発信するツイッターにはフォロアーが約六〇万人もいるそうです。これが大きい。一人の人間が発した情報が瞬時に六〇万人に伝わるわけですから。彼自身が「マスコミ」です。こういう武器を持っているんですね。そして、これを見ている人たちにとって橋下氏の言動はドラマを見ているように感じられる。リアルタイムで事態が進行し、それが橋下氏自身よって「つぶやかれる」わけですから、まさに「劇場政治」です。

IV 社会的背景——「期待されざる人間像」の輩出による日本社会の質的劣化

(一) 「教育の危機」に直結する「先生の危機」

このような現象が生じている社会的背景は、どのようなものでしょうか。

第一に、労働組合への加入率です。一九五八年には八六・三％あつたのが、現在日教組では二六・二％で過去最低を更新、全教の組織率も五・三％で、教職員団体全体の加入率は四〇・二％で半分以下です（三六年連続低下）。これですべて、労働組合の意義や役割を子どもたちに教えることができるでしょうか。組合に入っていない先生が「労働者の権利を守り、労働条件を良くし、賃金を上げるためには労働組合が必要だよ」、「社会人になって何か大変なことがあつたら労働組合に駆け込みなさい」、「労働組合に入りなさい」と、実感を持って言えるのかという事です。

二つ目が、先生の管理強化の問題です。校長等の権限が拡大し、上意下達の体制が強まり、ピラミッド型の構造が教員組織の中に出上がっていく。職員会議は形骸化し、民主的な討議の場ではなくなり、必要事項を伝達する場にすぎなくなっています。このように、先生自身の会議が民主的なものになっていないなかで、先生が民主主義について子どもたちにどう伝える

のか。そのようなことが可能なのか、という問題があります。

三つ目は、政治による教育への介入です。教科書検定による教育内容の歪曲。安倍氏はそれを狙っています。安倍氏は前の政権時に戦後教育体制を大きく転換しようとし、教育基本法を改定しました。しかし、彼はまだ不満を持っている。それは改定した教育基本法に沿った形で学習指導要領が変わっておらず、子どもに教える内容も変わっていないからです。次は、もっとひどいことをやるでしょう。「日の丸・君が代」も法律を作った時に強制しないと約束したのに強制している。これでどうして、子どもたちに本当の歴史を教えることができるでしょうか。四つ目は、先生の危機が増大しているということです。まず、非正規教員が増大しています。私立高校の三六・八%、公立高校の一九・七%の先生が非正規で、派遣・請負も増えています。高校教師の勤務時間は年一、八九九時間です。OECD諸国内で一番長く、平均より二三六時間も長い。しかも、勤務時間が長いにもかかわらず授業に費やす時間は年間五〇〇時間で、OECD平均より一五六時間下回っています。

つまり、子どもと接触する時間が少ないということです。試験の準備とか成績評価とか、保護者への対応、研修だとかいろいろあるんでしょね。給与水準も減ってきている（以上、いずれも二〇〇九年データ）。こういうなかで、公立学校の新任教員の病気による依願退職が一〇一人で一〇年前の二〇倍、うち九割は精神疾患（二〇一一年度）です。これでどうして、十分な時間をかけ、情熱を持って子どもたちに接することができるでしょうか。

教育行政については、いろいろな形での批判が可能ですが、端的に言って、一つだけ挙げておきましょう。それは「口を出さずに、金を出しなさい」ということです。付け加えて言うなら、「時間泥棒をやめろ」ということです。もっと先生が子どもと実際に接し、子どもの悩みを聴き、指導できるような十分な時間を保障しなければなりません。

(二) 時代の要請に反する人間類型の育成

大阪教育改革で、橋下氏は一〇校ぐらいエリート高校を作りました。大学進学率を高くしようとしているわけです。しかし、模範解答しかできないひ弱なエリートではだめです。ノーベル賞をとった山中伸弥氏は、苦勞して大きな成果を上げました。そこに、人間としての成長があるわけです。点を取るのが上手だとか、純粹培養されたエリートが、今の厳しいビジネス社会を生きていけるのでしょうか。創造力豊かな「問題解決型」の人間が求められているのに、エリート教育ではこの要請に応えることができません。

そして、今、自分の意見や主体性を持たず、政治への関わりを避けようとする消極的な若者も増えてきている。これは、今の政治のあり方を根本的に規定する大きな問題だと思います。無能な政治家・政党を、人気投票のように、面白そうだとすることで選んでしまう。これでは困ります。現代社会では、政治への発言力を持った民主的な人格が求められているのですから……。

日本の戦争責任や植民地支配の過ちを認めず、周辺諸国を貶み、民族的差別に鈍感な「愛国者」が増加しています。「ネット右翼」なんて、こんな人ばかりです。口汚く在日コリアンを罵り脅迫する。ところが、国際社会では、アジアの周辺諸国との友好を前提に、マイノリティに共感して民族の共生を尊重する「地球市民」こそが求められています。グローバル人材の育成という目標を橋下教育改革は掲げていますが、橋下さんのようなやり方ではこういう人材は育成されません。全く逆の方向を向いているのです。

(三) 日本社会の量的縮小と質的劣化

今、日本の人口は量的に縮小していて、今世紀末には半分になります。生産年齢人口（一五～六四歳）は一九九八年以降、一貫して減少し続けている。質的劣化も進んでいます。「無縁社会」ということで、隣の人が死んでいても分からない。人間同士の結びつきが希薄になり、支え合う力が弱体化している。

そして、希望が喪失してしまふ。今の若者たちは現状に対する満足度が高いと言われているが、それは将来、もっと悪くなると考えているからです。今が一番よいと考えて、現状を肯定してしまうのです。

また、どんな問題があつても、それを自分自身で解決して生きていく「人間力」、コミュニケーションの維持と発展に必要な政治的社会的能力が、なかなか身に付かない。こうして「期待されざ

る人間像」が育成されているのではないでしょう。その結果としての橋下現象であり、そして橋下教育改革はそのような「期待されざる人間像」を更に生み出すようになっていくのではないかと思えます。

むすび

教育は国の基（もと）と言います。現代で言えば、民主社会を担い、さらに発展させることのできる力を持った市民を育成する、その基本的な場、それが教育だということです。教育は序列を付けてエリートを選抜するということではありません。どのような人であっても、全ての人は自らの幸福を追求し、幸せに生きる権利を持っている。その権利を自ら行使できるような力を身につけられるようサポートし、そのような力をその人から引き出すのが教育の役割です。

今求められている教育改革は、橋下教育改革とは正反対のものでしょう。押しつけではなく引き出す教育、戦後教育の成果を否定するのではなく、発展させ新たな成果を生み出していく、創造的教育改革なのだと思います。そのために、みなさんが岩手の地で大いに奮闘されることを期待し、私の話を終わらせていただきます。

フォーラム「今、教育で何が起きているのか」

——第2部「五十嵐先生とのトーク」

武田…よろしくお願ひ致します。トークということですから、少し時間をとってゆっくり、いろんな話についてやりとりしたいと考えていたのですが、時間が限られていますので、事実上インタビューになるのではないかと感じています。今日のご講演をもう少し角度を変えて五十嵐先生のお話の背景にあるものを、私の方からお尋ねして、今日のご講演の内容をそれぞれに膨らませていただければ、と思っています。

あらかじめ先生からいただいたレジュメの最後にブログのことが触られています。「転成仁語」というブログ、私もいくつか拝見させて頂きましたが、その中で先生が若い頃に画家になりたい、絵のことについて小さい頃から関心を持っていて、ゆくゆくは画家になりたいという思いをお持ちだったということが書いてありました。また大原美術館のことも先生はいろいろお書きになっています。今日のご講演は政治的に非常に熱のこもったものですが、ブログからは少し異なる印象を受け、おもしろいと思いました。

大原美術館や大原社会問題研究所というのは、ともに大原孫三郎によって設立されたわけですが、大原孫三郎が、倉敷紡績（倉紡）を経営した中で、工場の中に尋常小学校を設置したと

いう人でもあるんですね。そういう大変ユニークな人だなあと思いましたけれども、短時間で恐縮なんです。大原孫三郎とはどんな人物なのか、というところからお話しただけだと思いますが。

五十嵐…大原孫三郎につきましては、城山三郎が『わしの眼は十年先が見える——大原孫三郎の生涯』（新潮文庫）という伝記を書いています。この言葉は大原孫三郎の口癖だったそうで、大変、先見性、先見の明のある人でした。大原社会問題研究所は創立されて93年目になりますので、10年先どころか、100年先も見えたんじゃないかと思えます。大原社研だけではなく、労働科学研究所や倉敷中央病院も作りました。倉敷中央病院は、ベッド数で日本最大です。それから大原奨農会農業研究所も作りました。これは現在岡山大学資源植物科学研究所になっていて、小麦やバイオの研究をしています。

全部残っているんですね、大原の作った主なものは。彼は時代に先駆けて事業を起こし、将来に向けて残していった。しかも、戦前のことですから。「社会問題」などといったら捕まっちゃうような時代でした。よく研究所が生き延びたなと思えますけれども、そういう先見性を持っていました。また、日本のロバート・オーウエンと言われるように、女工さんを大切にしました。保育園や寄宿舎を整備して働く環境をよくする。これも、先駆的な業績と言えます。現在、工場の跡地も残っていますので、倉敷に行ってみてください。アイビースクウェアという場所

があつて、蔦が絡まっています。ここが工場の跡地で現在はホテルになっています。女性に人気のホテルで、ぜひ宿泊して大原孫三郎を偲んでもらいたいと思います。大原美術館の周りは美観地区になっていて、孫三郎の旧宅も残っています。

個人的な思い出としては、この大原美術館創立80周年記念レセプションに出たことが忘れられません。西洋の名画、大好きなセザンヌやルノアールの絵などの前でワインを飲むことができました。その時、大原社会問題研究所の所長でよかつたなあ、と思いました。あれほど所長になつたことを幸せに感じたことはなかつたですね。先ほど画家を目指していたと言われましたが、それほどのことではない。若い時の一時の気の迷いにすぎず、高校を出てから一度も絵筆を握つたことはありません。しかし、絵は好きですから、大原孫三郎に大きな恩恵をこうむつたと思つています。

これからも大原の思いを引き継いでいく。働くものを大切にすることを、働く人たちの満足度を高めるだけではなくて、働く人たちの満足度を高める。利潤や儲けだけでなく、顧客満足度を高めるだけでなくて、働く人たちの満足度を高める。こういう考え方をした経営者だつたんじゃないかと思ひますので、その点を学んでいきたいなと思ひます。

武田…ありがとうございます。もつとお伺ひしたいのですが、たぶん大原孫三郎は、五十年先生のような人が社研の所長となつたということが大変喜んでいるのではないかと思ひま

す。次の話題に変えていきたいと思ひます。

先生はやはりブログで、『戦争と平和』が愛読書の一つだとおっしゃっております。そのことに触れられるお時間はないのですが、今日お話しになった橋下徹氏や石原慎太郎氏なんかは、平和の問題についてどんなことを言っているのか、どんな風に戦争を受け止められているのか、そのあたりをうかがいたいと思ひます。

五十嵐・私が政治や社会問題に関心を持ったのは中学校の時です、社会科の先生が授業でベトナム戦争の話をしたんです。その頃、たまたまテレビでアメリカの侵略に抗議する仏教者が焼身自殺をする映像を画面で見えました。燃えるわけなんですよ、私が見ている目の前で。その後、日本でも由比忠之進という人が日本政府のベトナム戦争への協力に抗議して焼身自殺する。それを知って、自分には何もできないのか、と強く感じたわけです。自分にも何かできるんじゃないか、しなきゃいけないんじゃないか。こういう人たちが戦争に反対して自ら命を絶つ。それをただ眺めているだけの自分でよいのか、と深く考えました。それが始まりです。その時の社会科の先生が今、新潟県上越市で9条の会の会長さんです、この春、そちらに行つて憲法についての講演をしてきました。このような形で、先生に恩返しできたんじゃないかなと思つています。

平和問題について、橋下さんや石原さんは何も語っていません。「平和」という言葉を橋下さ

んは口にしていない。関心がないんだろうと思いますね。外交・安全保障問題についても、「維新八策」ではほとんど付け足しです。日米同盟を基礎にすると行って、何も新しい策がない。憲法についても、ガレキ処理で困っているのに他の県が引き受けないのは憲法9条が悪いからだと言っています。何を言ってるのか、と思います。ガレキ処理については放射能で汚染されている可能性があるから周りの人が不安に思う。だから、そう簡単に「イエス」とは言えないという事情があります。「全ては憲法9条が原因だと思っています」だなんて、どうしてそんなことを言うのでしょうか。9条とどのような関係があるのか。全く別問題ではありませんか。そういう平和の問題、憲法9条の問題についても、橋下さんの認識は新しさが無い。先ほど、「維新」は「王政復古」をもたらしたと言いましたが、そのような時代錯誤の古さばかりが目立つと言っているんじゃないかと思います。

武田…ありがとうございます。次の話題に移りますが、先生の今日の話の中で、「これでどうして」という言葉がでてきます。橋下氏などの話を聞くと「これでどうして労働組合の意義を教えることができるのか、とこれと同じような調子で、「これでどうして民主主義を」「これでどうして歴史を」「これでどうして子ども達と接する事ができるのか」と。もう少し一般的に言えば、「労働組合」「民主主義」「歴史」「教育、子ども」というようなことについて、熱く語られたわけです。そういう問題を冷静に考えると、橋下さんもそうなんですけど、それ

を支持する人もそうですが、本当に日本の現代における社会科学的な教養というか、一般常識というか、民主的な常識ですよね、そういうものが非常に希薄になっている。これはいつたいなぜなのかということ、われわれとしても考えざるを得ないのではないかと。

そういう時に、一面では「政治が悪いんじゃないか」と考えられるけれども、社会科教育のあり方はどうなっているんだ、あるいは、もう少し大げさに言うと、日本の社会科学って言うのは、こういう問題に対して答えてきたんだらうかと、そういうことも私なんか考えざるを得ないので、そのあたり先生は何かお考えをありましたらお伺いしたいのですが。

五十嵐…社会科教育については、私はほとんど情報も専門的な知識も持っておりませんので、どういふ問題があるのか、むしろこちらからお伺いしたいと思います。けれども、なぜ橋下さんのような言説が易々と受け入れられてしまうのかということについては、日本の社会のあり方に大きな問題があるんじゃないかと思っています。体制順応的で異端を排除しがちであるという社会のあり方です。特に昨今は、新自由主義的な「勝ち組」と「負け組」の分化、それに加えて「勝ち組」をよしとする優勝劣敗の考え方が強まり、ジャングルのような社会へと変わってきています。そういう中で、橋下さんは「勝ち組」ですからね。

彼は貧しい状況の下で、恵まれない環境から出発し、司法試験を受かって弁護士になって、人気のタレントを経て、大阪府知事から大阪市長へと転身した。これは見事な「成り上がり」

【論巧】 橋下『教育改革』とその政治的社会的背景

です。「勝ち組」の典型例だと言ってもいい。そういう人が、自らの成功に強い自負心を持っている。だから、自己責任でやりなさい、と言いたくなる気持ちはわかります。自分の力で成り上がってきたわけですからね。逆に言いますと、「負け組」、弱者、少数者（マイノリティー）に対する非常に冷たい視線を持っている。これらの人々への同情はほとんど感じられない。逆境にある恵まれない人々たちを、社会としてどうサポートするのか、どう助けていくのか、という視点がない。そういう点では、この人の発想はまさに新自由主義的な考え方に非常に近いものがあると思います。それが、どこまで社会科学教育、あるいは社会科学のあり方と関わっているかということについては、私の方からお伺いしたいところです。

武田・少し関連する話だと思いますが、もう一つ橋下さんに関わって、経済学者の石川康広さんという方が、『橋下「維新の会」がやりたいこと』という本を今年出しているんですけども、それを読んでいろいろ考えさせられました。その中で、最後の方に、日本社会をどうしていったらいいのか、ということに焦点を当ててはいるんです。結論はこうです。一人一人の市民が、自分で考え、家族や友人達と話し合うことではないか。あるいは、ちょっと離れたところで、いつでも社会全体のことを考える人が必要だ。こういうことを経済学者の石川さんが言っているわけですよ。

今日の先生のご講演もそうですが、労働政治学の分野、あるいは、経済学の分野、そういう

方々からこういう話しを聞くというのは、時代が変わってきたのかなというか、おもしろいなあと感じているんです。ただ、社会全体のことを考えると、自分で考えるというところに社会学者が思い立っていて、じゃあどうしたら社会全体のことを考えることができる人間を日本社会が育てていくことができるのか。これはやっぱり、広い意味で教育の問題に突き当たると思うのです。

社会全体のことを考えるという人間は先生の今日の話では、現代社会は学校とは別にそういう人を求めているのだ、というお話でもあったのですが、企業は求めているかもしれないけども、やはり我々も求めているし、教育もそういうものを大事だと唱えているんだと思いますが、社会全体の事を考えることができる人間というようなものを、難しい質問かも知れませんが、先生はどこをどうすれば、そういうものに近づくことができるのか、そのあたりご意見をぜひ伺いたいと思います。

五十嵐：身近なところから、問題意識を持つて行動する、ということじゃないでしょうか。今、原発問題を契機に首相官邸あるいは国会周辺で毎週金曜日に、幕末の「ええじゃないか」を彷彿とさせるような民衆運動が盛り上がっています。あそこにいる人たちは、様々な団体に属する人たちもたくさん来ていると思われかもしれませんが、そうではない個人もいます。一人一人が自分で考え、そして何かできることはないかということで、できる範囲での行動に立ち上が

っている。それでいいんじゃないかと思えます。

ただ、もう少し言いますと、参考文献のところ挙げていますように、私は『「知力革命」の時代』という副題をつけた『現代日本政治』（八朔社）という本を書いています。今は、その「知力」「知の力」によって「革命」つまり社会を変えていく。そういう時代になってきているのではないか、と思います。

情報というものが非常に大きな意味を持ってきている。情報を集め、知恵を働かせ、的確に判断して自分なりの意見、見解を作っていく、ということが大切になってきていると思います。

情報はあふれている。たくさんの方がいろんな形で、マスコミによってばらまかれています。ゴミのような情報もあります。それを見極める。選択する。「情報リテラシー」と言いますが、読取る力を培っていく。事実を知ること、そしてその事実が意味していることを理解する。これが真実を知ることになるでしょう。それを知ったからには、自らも何らかの形で伝えていく。情報を発信していく、ということをやりたいものです。しかもそれは、非常にやりやすい時代になってきています。メールやインターネットがありますから。

私はブログをやっておりますけども、今の画面に移ってから410万アクセス。その前に150万アクセスほどありましたので、合計で560万アクセスです。だいたい1日2000アクセスあります。2000枚のピラを毎日まいていけるようなものです。そういう点では、1

枚1枚ピラを書いて刷って配布する手間がかからない時代になっている。そういうものも利用しながら、ネットワークを作っていく。情報のネットワークを作っていく。それがある量になれば社会的な力に転嫁し、さらには政治を動かすことができるのではないだろうか。

そうなる、実際に会って話をするという形で顔を突き合わせることは稀で、逆に大切になってきます。みんなバーチャルでしょう。だから、リアルな感覚がだんだん薄れていっちゃうんですよね。ですから、時には仲間と会って、悩みを話したり、励まし合ったり、生身の人間同士がいろいろ会話をする。顔を会わせて交流するというようなことも大切なんじゃないかと思えます。

武田…ありがとうございます。ブログを読ませていただいて、もう一つ思ったことがあるんですが、ちよっとこれは打ち合わせ外の事なんですけど、あるいは、触れていいのかなのかわかりませんが、みなさんお気づきでしょうか？先生の右目がご不自由なんですよね。それは、学生運動の頃に暴力学生によってひどい目にあっ、それ以後失明されてしまった。そういうことをご体験されているわけです。

私の学生時代からの友人にも同じような人間がおりまして、今でも街を歩くときは、大きい魔法瓶を冷蔵庫代わりにして薬を持ち歩いて、それを使わないとだめな人がいるのです。その人もやはりその時の犠牲者なんです。

そういう方々のことについても先生はいろいろお書きになっているわけで、皆さんにお知らせしてもよいのかと思いました。

ついでに申し上げれば、今回石原都知事がやめられて、後継者として推薦しているのは副知事です。この副知事はある大学の全共闘の闘士でしたよね。そんなこともあって、あえてイレギュラーな質問をさせていただいたんですが、そのあたりについて今お感じになっていることを触れていただければと思うのですが。

五十嵐…あまり触れたくない過去ではありますが、仰られた通りです。私は学生時代、都立大学の自治会委員長をやっております、やめた直後、暴力学生に竹棹でメガネの上から右目を刺されて失明しました。今も右目があるように見えますけれど、それはプラスチックの義眼です。刑事コンボって知っていますよ？ その俳優であるピーター・フォークも義眼です。私は1969年に大学に入学しましたが、東大の入試が中止された年でした、大変な時代でした。今言われたように、猪瀬さんは私と反対側にいた方です。信州大学全共闘の議長でした。国労の書記をやっていたこともある。そういう過去を、彼はもっているわけです。清水慎三先生のゼミにいたと言います。今は、石原慎太郎都知事の後継者ですから、左から右に大きく旋回してしまいました。

竹棹で突いた学生は、私のよく知っている後輩でした。同じ経済学部です。その後輩が、良

く知っているはずの私めがけて竹棒で右目を突く。あと少し深かったら、私は障害者になっていたかもしれないし、こうして皆さんの前でこのような話ではできなかったでしょう。命を失っていたかもしれません。平気でこういうことができる人間が、当時はたくさんいたんです。全共闘や新左翼と呼ばれていた人々です。ある意味では「信念」を持って暴力を振るい、人を襲って命を奪おうとする。しかも、中核派や革マル派などのセクトに入った人たちは、いまだに町の片隅に隠れてコツコツ爆弾を作っている。

時々そういう人たちが摘発されて出てくると、50代後半だとか60代だとかという年齢になっています。「かわいそうだなあ」と思いますね。若いときに誤った道に入り込んでしまい、その後の人生を棒に振ってしまう。そういう形で誤った人生を歩む。若いときの思い込み、若いときの間違いの結果です。そのように教え込まれ、そう思い込んでしまったんでしょう。政治的なテロを行使するテロリストも、間違った教育の犠牲者だと言えるかもしれません。

さつきは教育の大切さについて強調しましたけれども、教育は誤ってはならないと思います。若者、子ども達を誤って教えてしまえば、命を大切にせず、人権を破壊し、みずから進んで人の命を奪い、進んで自らの命を犠牲にするような、そういう恐ろしい人間も生み出されていくのですから。戦前の教育はまさにそうでした。「自爆テロ」を生み出すような教育にも、このような問題があります。そうであってはならない。政治は暴力で変わるんだと思いつくような人々を生み出す教育を行ってはならない、と思います。そういう点で、教育の大切さと同時に、

恐ろしさについても指摘しておく必要があるでしょう。

武田…イレギュラーな質問にもかかわらず、かなり突っ込んだお話をしていただきありがとうございます。ありがとうございました。

以上で、短時間ではありましたが、第2部を終わらせていただきます。ご講演と併せて、今日の政治状況だけではなく社会問題、教育問題にもわたって五十嵐先生のお考えをかなり幅広く伺えたのではないかと思います。五十嵐先生、ほんとうにどうもありがとうございます。